

がくせいになりました (CC0)

がくせいになりました

元作者…もりゃき

この作品は CC0 1.0 Universal ライセンスのもとで
パブリックドメインに捧げられます。
法律の許す限りにおいて、
著作者は本作品の著作権および関連する権利を放棄します。
詳細は以下を参照してください

<https://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/>

第一章 異世界転生したかもしれない

目が覚めた…ただ、何か強い違和感がある。

俺の名は…セドリック、そうだな俺はセドリック。なんか別の名前だった気もするのだが。そして、いつものようにスマホを手に取りうとして…ってスマホって何だっけ？

起き上がると、いつもの自室とは違う少し豪華な部屋…って、いやこの部屋こそ俺の部屋だぞ。

『トントントン』というノックの音に応えると、ドレス姿の可愛い少女が入ってきた。

「お兄ちゃんおはよう、顔色悪いけど、どうかしたの？」

お兄ちゃん？俺にいたのは第一人…いや、この少女は妹のアリアだぞ、弟なんていないだろう？今日の俺は何なんだ？本当に何かおかしい。

「いや、どうもしないよアリア…ところで今日は何日だ？」

「そんなの忘れるわけじゃないじゃん！今日はお兄ちゃんのお五歳の誕生日！」

そうか…身体の違和感は、身体が小さくなったせいかな…って、それでは俺がかつて身体が大きかったかのような…

「いや、すまん、今起きるよ」

しかし、ベッドから立ち上がろうとしたが、俺の部屋は布団じゃなかったか？っていうか布団ってなんだったか？そして、身体のバランスがうまく取れずベッドに座り込んでしまう。

「やっぱ、なんか今日のお兄ちゃんおかしいよ？あ、誕生日プレゼント！」

アリアが渡してきたのはバースデーカード、俺らしき絵が描かれている。ただ文面はなんだか変な表記だ。

「ありがとう、アリア！」

「あ、ちよつとごめんね」

妹が、部屋の片隅にある、まるで猫のトイレのような場所で座り込んで…砂にじんわり色が付いていく。

なんだコレ…トイレ？こんな劣悪なトイレ、史実でもなかったはず…いや、今まで俺も使っていたんだよな？

「え…アリア…」

アリアの姿を見ていて、自分の中にあつた違和感は頂点に至り、今までモヤがかかったような違和感の正体だった過去の記憶が次々と鮮明になってくる。

異世界転生…ラノベみたいな状況に陥ったと考えれば、目の前の状況と記憶は、異世界転生の描写とほとんど同一としか言いようがない。

ここは異世界であり、自分は現代日本から転生したのだ、状況証拠は十分である。

信じがたいが、もはや否定する余地がない。そのショックのあまり意識を手放した。

意識を取り戻すと夜だった。

「もう、セドリック心配したのよ。せっかくの誕生日に倒れるだなんて…あ、私からの誕生日プレゼント」

そう声を掛けてきたのは、母フロイラインだ。そう、母。凄く若いな。

誕生日プレゼントとして手渡されたのは、奇怪な表記だけど『マナー教本』と書かれているようだ。

一度気を失った事で、前世と今世と思われる記憶がある程度整理された。

ここはグンマー王国、そしてうちはスワン子爵家。

俺はセドリック・スワン、子爵家次男なので、いずれ自分で生計を立てなければならない身だ。

おそらく婿入りの話など、期待できないからなあ。

大丈夫、もう記憶は混乱していない。

今日は貴族の義務、学力認定の日だった。学力認定員のリリィ先生を結果的にすっぱかしてしまった。

「リリィ先生は大丈夫？」

「大丈夫かなんて、セドリックの話でしょ…先生はもうお休みになられたわ」

「わかったよ、僕もまだ万全じゃないし、明日改めて」

「そうなさい」

…そういえば、言葉は普通に日本語が通じるぞ。ここ、異世界だよな？

第二章 リリイ先生の学力認定

翌日、セドリックは学力認定を受けるために自室から客間に移動した。

しかし、昨日はゆっくり観察できなかったが、家具なんかは重厚な作りだなあ、さすが貴族。

リリイ先生は学園を飛び級で卒業し、学力認定員という王家直属の仕事をしている。

その歳僅か十三歳、学園卒業だけでもエリートと見做される中、リリイ先生は天才の名を欲しいままにしている才媛だ。

「さて、この学力認定ですが、基本的に解ける問題とは考えられていません。なぜなら五歳での学力認定では、ほとんどの子息令嬢にとっては、問題文を読むことすらままならないのですから。気を張らずに取り組んでくださいね」

そう言いながら机の上に置かれた問題文の奇怪さ、そして「なぜ日本語が通じるのか」の一端を垣間見た。

最初の問題はこんな具合だ。

「イkeのKサンモNだiwoトヤナSi」

一応は読める「以下の計算問題を解きなさい」と、一応は読めるんだけどこんな問題文がずらりと並んでいると、違和感のあまり吐き気さえ催してくる。

解けなくても問題ないというが、アラビア数字で書かれてる計算問題は簡単な算数なので瞬殺した。

しかしその他、文章が求められる問題をどうするか…自分の知る日本語書いても正解は得られないだろうし、文字を書ける事自体を不審に思われるかもしれない。

「先生、今の自分にできるのはこれだけです」

「ふむ…計算問題は満点、素晴らしいです。しかし、その他は簡単な問題も解けていない。これはかなり極端な結果ですね…」

「極端…ですか？」

「ええ、あまりにも。多くの優秀とされる生徒は、むしろ文章の問題で点数を稼ぐですよ？そして、いくら優秀であっても計算問題で満点は、少なくとも私は見たことがありません」

うわぁ…あの簡単な算数でこの評価か、そういえば掛け算割り算も混じってたな…これはやらしたか？もう少し間違えるか答えない方がよかったか？

「まあ、その辺は追々学んでいけばいいことです。セドリック・スワン子爵令息、認定試験合格をここに宣言します。おめでとうございます」

「合格なんですか？計算問題しかできてないのに」

「先にも伝えたとおり、ほとんどの子息令嬢は問題文を読むことすらできないのです。合格ラインは五点ですよ、一問で二点の計算問題が十問正答となれば、当然合格です」

「ありがとうございます。ところで、この認定試験とは何を認定するのですか？」

「王家直属の認定員から、家庭教師として教える力があるかどうかの認定ですよ？そんなことも知らなかったのですか…」

リリイ先生は呆れながら答えるが、そもそも合格を期待されてもいなかった俺は、家族からさえ何の説明も受けていないのだ。

「では、今後、僕には認定員の先生が家庭教師に付いてくれるというわけですか」

「ええ、具体的には、私リリイ・マルセーネが、これから泊まり込みで家庭教師をします」

こうして、少し怖そうなりリリイ先生が家庭教師になることが、図らずも決定したのであった。

第三章 この世界の言語特訓と写経

さて、今の自分最大の課題は「文章を読める、だけど書けない」に尽きる。

リリイ先生の教えによれば、この世界を構成する文字は『ヒラキ』『カナキ』『アルキ』の三種、漢字は存在しないようだ。

この三種の文字は当然五十音で提示されたが、それぞれが平仮名、片仮名、アルファベットだった。そんなのは前世からの常識なので、一目見て興味を失った。

「単語を書くとき、このヒラキ、カナキ、アルキの使い分けの法則性は何ですか？」

「法則性？法則なんてあるのかしら、ひたすら多くの単語や表記に触れて、覚えるしかないんじゃないかしらね」

「実は僕も読むことだけはできるんです、だけど書くのは全くわからなくて」

「そうね、まずは多くの書籍に触れるのがいいかしら…私もそうしたし…」

天才の呼び声高いリリイ先生、なんか頼りないぞ…

「じゃあ先生こうしましょう、まずはうちの書斎にある書籍を声に上げながら書き写す。こうすることで、目、口、耳、手で記憶が定着しやすいはずです」

「ちょっと待って、それ写本の作成じゃない！写本ギルドの認可なく、写本を作ったりしたら重罪よ！」

「じゃあ、ちょっとくら写本ギルドの認可を取りに行ってきます」

「五歳のセドリック君が行っても門前払いに決まっているでしょう！」

「それなら、どうしろって言うんですか…」

「…わかったわよ、私がギルドの認可を取ってくるわ。認可を持った者の監督下でなら、写本作成も法律上問題はないですから」

「よろしく願います！」

いやあ、さすがリリイ先生頼りになるなあ！間違いなく認可は取れるだろうから、早速本の選定に入っておくか。

言語特訓だから、文章多めのジャンルがいいな…『グンマー王国史』『地理』『貴族年鑑』そして数冊の物語でいいかな？

プログラミング言語では、写経が一番効率良い学習だったしな！グンマー言語の法則性を見

いだすにも、きつとこれが最速だ。

早速『グンマー王国史』を開いた、最初の吐き気を催す感覚にまでは至らないが、やっぱり違和感が凄まじい。

我慢しながら『グンマー王国史』を声に出して、羊皮紙っぽい紙に写していく。

するとリリイ先生が帰ってきたが、いきなり顔を蒼白にして悲鳴を上げた。

「なんで、もう写本を始めてるの！ギルドの認可を持った者の監督下でない写本は重罪、そう言っただけだよ！」

「いや、先生なら絶対認可取って戻ってくると思ったから、ちょっと早めに練習をと…」

「写本ギルドの認可は即日下りるような物じゃないの！試験は受けてきたけど、その後お偉いさん達の面接とか、認可を受けるまでに何日も掛かるのよ…はあ、頭痛い」

「体調悪いんですか？頭痛薬飲みます？」

「だ・れ・のせいだと思ってるのよ！…はあ、この書きかけの写本は見つかったら大変だから、燃やしておくわよ」

「もったいない」

「セドリックの人生には代えられないでしょう！？どうやら、文字を書けるようにする前に、一般常識や法律の方が先のようなね…あと貴族年鑑の写本は止めておきなさい、気を悪くする貴族も多いですから」

そう、確かに。写本ギルドの話も知らなかったし、写経が重罪だなど、色々知らないことが多いのは今日一日で明らかになった。

そういえば、リリイ先生の俺の呼び方が『セドリック君』から呼び捨てになったな、距離が縮まったようで嬉しい。

第四章 屋敷の悪臭を解決しよう…前編

この屋敷に限らず、どこも悪臭が酷い。正直、食欲も失せるほどだ。理由は単純、ほとんどの部屋に配置されている猫のトイレのような排泄場所のせいだ。

まずは自分の精神衛生上、屋敷からこの悪臭を可能な限りなく減らそう…そのためには、まともなトイレの作成と利用習慣の定着が問題だ。

子爵家の次男坊となると、それほど使える金も多くないので、大規模な工事は最初から却下だ。

『次男坊のお遊び』として許容されるトイレの姿、悪臭対策…まず屋敷の大きな改築は無理だ。

屋敷に隣接した小屋を作り、そこに便器を設置し、便をそのまま庭に落とす。それだけでは庭の悪臭が解決できないから、肥だめにして悪臭対策としよう。

確か、肥だめで肥料を作るのに必要なのは…藁や干し草、落ち葉、土、水、木炭辺りだった気がする。

トイレの清掃水や雨水を利用すれば、ある程度の水は確保できるはず。

細かい分量は覚えていないが、発酵させればいいはずなので、試行錯誤しながら悪臭が漂わなければそれでいい。

もし、それが肥料として活躍するなら領民も大喜びだろう…ただ、こちらは過剰な期待をしないでおう。

父であるスワン子爵の執務室をノックする。

「誰だ？」

「セドリックです、少しご相談があります」

「入れ」

父は書類に目を通しながら、時折書類にサインをし続ける。

「で、相談とは何だ？」

「屋敷のみならず、領地、王都全域を覆う悪臭、その対策を考えましたので少しでもお力添えをお願いしたく」

「随分大きく出たな、で、その目処は立っているのか？」

興味を持ったのか、父は書類を机に置いて、真剣に話をする体勢になった。

「悪臭の原因は排泄物が主だと考えています、それをまずは一カ所にまとめる事で、屋敷内の悪臭軽減を手始めに行いたいと思います」

「ふむ…その排泄物をまとめた結果、その悪臭が酷くなるだけでは、結果は変わらないのではないか？」

「それに関しては、今は確約できませんが、屋外において、排泄物の肥料化の案がございます」

「ほう、肥料か…それが実際に出来上がるとしたら、我が領内にとっても有益な話だ」

「はっ、ただ…肥料に関しては先ほど述べたとおり確約できかねますので、まずは次男坊のお遊びとして可能な予算を頂ければと」

「あいわかった、元々セドリックはそれほど散財をしていなかったからな、そこの今までの予算を使うといい、具体的な内容は」

「排泄場所を集約するための部屋を屋敷に隣接する形で増設し、その下に穴を作ります。まずはそれをもって屋敷内の悪臭軽減の効果が期待できるかと」

「なるほど、それなら屋敷は小屋と繋ぐ扉程度の改修で済むな。よろしい、好きに進めるが良い」

「ありがとうございます」

セドリックが退室した後、スワン子爵は脱力しながら『僅か五歳の息子に圧倒された』事実
に冷や汗が止まらなかったのは、子爵しか知らない事実であった。

セドリック自身もまた退室した後、父の圧迫感による緊張の動悸がおさまるまでに結構な時間がかかった。

あまりに消耗してしまったので、セドリックはその日は早めに休みを取った。翌日になって「ほぼ全面的に受け入れられた」という事実、やっと気づくのであった。

ここでセドリックは大切なことを失念していたことに気づいた、自分に割りあてられた今までの予算を知らない。

仕方なく、執事を呼び止め、自分が持っている予算を確認する。

「坊ちゃんの予算は現状金貨十六枚といった所ですね」

この言葉でセドリックは更に追い詰められる。金貨一枚でどれだけの事ができるのか、そう

いう経済観念を持っていないのだ。

「屋敷に隣接して増設する形の小屋を作るとしたら、その金貨十六枚で足りるのか？大規模な小屋ではなく小部屋でいいのだが、一階と二階それぞれに作成することになる。極端な話、小屋には穴だけあればいいが、少し特殊な形状の座面があれば望ましい。同時に、そこへの通路のために屋敷にも手を入れる形になるのだが」

「平民一家が暮らしていくには、年間金貨一枚もあれば十分です。小屋が複雑な構造でなければ数ヶ月の賃金で済みますし、作業員八名雇って三ヶ月と考えれば、そちらは金貨二枚で十分でしょう。ただし…」

執事は少し考え込む。セドリックは不安に思いながらも表に出さず、続きを待つ。

「屋敷に手を入れる場合、より高度な職人を雇う必要があるでしょう…こちらは子爵様の許可も必要ですし、許可を得られても専門的な職人を四名雇って三ヶ月で金貨四枚が相場になるかと。作業員と含めて合計で金貨六枚で収まりましょうな」

「わかった、その金額で人を集めてくれ、それまで設計を考える」

「設計書を書くのも作業員の仕事ですが、それほど特殊な内容なのですか？」

「どうだろうな…では作業員と話をして、具体的に詰めていこう、特殊作業と判断されたら報酬は上乘せしてもいい。あとは頼んだぞ」

実際は子爵家から継続的に仕事を請けている作業員や職員に発注するので、執事が提案したほどの金額には届かない。たとえ複雑な設計で割増をするにしても。

提案した予算は、それこそ子爵家と縁のない所に発注した場合の、最悪の金額だ。

執事は、僅か五歳にして財を惜しまずに何かを成そうとする、セドリックの背を見ながら必死に感動の涙を堪えるのだった。

一方セドリックは、自分の予算から全額放出しても足りないのではないか、そう不安を抱いていたので、割増があっても半額程度で達成できそうなことに大満足で、ニヤニヤ笑いが止まらなかった。

第五章 屋敷の悪臭を解決しよう…後編

執事が、依頼した通り八名の作業員を集めてくれたので、概要を説明する。
ちなみに屋敷の改修については、父子爵の管轄なのでこちらにはいない。

「私が作りたいのは排便設備だ、と言っても構造はそれほど複雑ではない。一階と二階それぞれに小部屋がある小屋を作る。その小屋は極端な話、人が跨がれる程度の穴さえあればいい。ただ予算が大幅超過しないのであれば、このような座面を作って設置してほしい」

図に書いたのは洋式便所的な座面だ、ただ穴から落とす形式なので当然タンクもなければ蓋も不要なので、ただの穴があるだけの便器座面だ。

「いや、この程度の座面なら追加予算も不要ですよ。ですが坊ちゃん、この設備は何のために作るのです？」

「とりあえずは『次男坊のお遊び』と笑いながら作ってくれば良いよ、一応は便の悪臭対策を目標しているんだけどね」

「悪臭対策、確かにお貴族様ならではの発想ですな。こちらとしては対価を頂ければ、仕事を断る理由もありません。承りましょう」

「ありがたい、対価については執事に任せてあるから、そちらから受け取ってほしい」

「『これから三ヶ月、よろしく願います！』」

そんな時、猫便所(仮称)を清掃していた使用人が、少し涙目になりながらこちらを見ていた。

「どうしたの？何でも言ってごらん？」

「いえ、この排便設備ができれば、確かに私の負担は減りますが…その結果、解雇されるのではないかと不安なのです。そうなったら私なんかを雇ってくれる場所はあるのかと…」

なるほど、確かに猫便所(仮称)清掃は過酷な仕事だ、だけど需要があるから彼女は雇われている。

彼女の待遇は決して良くないこともわかっているが、だからといって見捨てるつもりは毛頭ない。

「いや、排泄設備が上手く回り始めたら、もっと大変な作業が待っているんだ。それはとても根気が要り、とても大切な作業になるはずだ。設備が回らなければ今まで通り、回れば必ずそ

ちらに転属させてあげるから、心配しないで」

「ありがとうございます…ございます…セドリック様」

ぼろぼろと涙を流す猫便所(仮称)清掃員。うん、肥だめを作るには人手が絶対必要だ…最悪自分の予算から給料出してでもどうにかしよう。

そして三ヶ月後、屋敷と連結された排泄施設、すなわちトイレが完成した。

そして…しまった！トイレの下に穴を掘る指示を忘れてた！

「完成までありがとう、深く感謝する。そして今から有志に緊急の仕事依頼を発したい！上の穴から排泄物を受け止める穴を、十分な広さでおよそ二十メートルの深さで掘ってほしい！山分けで金貨四枚でどうだ！」

セドリックは、とにかく何とかしなければと焦りながら、思わず相場よりも遥かに高い金額を口にする。困惑する作業員達の中から声が上がる。

「いやいや坊ちゃん、排便設備って聞いてるんですから、十分な穴は設計段階から用意してますよ…それにしても山分け金貨四枚ってどれだけ焦ってるんですか…」

「おいおい、いきなりバラす奴があるかよ！せっかくの山分け金貨四枚が、フイになっちゃったじゃねーか」

「おまえ、坊ちゃんからぼったくる気だったのか？そんな事したら、今後子爵家から仕事貰えなくなるだろうが、馬鹿野郎が！」

「ちげえねえ、ま、そういう訳できつちり俺たちの対価銀貨十五枚の中に、穴掘りも含まれてるんで安心してくだせえ」

思わず金貨四枚という大金を差し出そうとした事に赤面するが、皆はほっこりと見ている。それが余計にやるせない。

ところで銀貨十五枚…？銀貨十枚で金貨一枚換算だから、執事の言っていた金額の四分の三だ。どうということだと執事を睨み付ける。

「いえ、最悪を想定した予算で計上いたしました故。いつもの子爵家が優遇している所が依頼を受けてくださり、安くあがりましたな坊ちゃん」

「ということは、もしかして職人達の見積もりも？」

「ええ、こちらは屋敷の構造に精通した職人を無事雇えたため、金貨二枚で済みましたな。合

計で金貨三枚と銀貨五枚の支出です、よかったですな坊ちゃん！ほっほっほ」

思いつきり騙された気がするけど、こちらの支出が大幅減なのだから文句を言う筋合いではない！

そんなこと、わかっているが悔しい、さすがは執事と言うべきか…

こうして、とりあえずトイレが完成し、まずは家族や使用人達に積極的に使って貰うように声を掛ける。

父である子爵の鶴の一声で、全員がトイレを積極的に使うようになったが…あれ、もしかして便器が足りなかった…？結構危うい混雑状況だ。

時を置かず、作業員達を呼び戻して訴える。

「すまない！やはり緊急依頼だ、出入りは屋外で構わないから、一階に使用人向けの排泄設備をもう一つ作ってくれ！」

どうやら、資材の余りや便器の試作品を流用したようで、一か月後には屋外にトイレが完成した。

ちなみに対価は銀貨八枚…一人当たり銀貨一枚で済んだ、うん、よかった。

排泄施設は…そのまま『トイレ』という名前でいいだろう。

あとは、猫便所(仮称)清掃員を、肥料づくりの要員に配置換えして貰えるよう、父に願うだけだ。

第六章 兄の帰省と数学大全

トイレを作り、かなり悪臭が軽減した子爵家に、学園寮に入っていた長男、アレックスが久しぶりに帰省した。

家族や使用人が出迎える中、アレックスが誰ともなく問いかけてきた。

「なんか、屋敷の周りは嫌な臭いが少なくないか？」

「ああ、セドリックのトイレ発明のおかげでな…屋敷の中はもっと臭わないぞ」

「な…せ、セドリックが…？」

「素晴らしい仕組みだぞ、臭わなくなるし、便すら肥料に変えかねない仕組みだ」

「いや、まだ肥料はすぐには目処が立っていないけど…」

セドリックは謙遜するが、誰もが異臭が抑えられている時点で、ほとんど成功しているのではないかと考えている。

肥料に関しては材料だけ教えて、あとは元猫便所(仮称)清掃員さんにお任せなんだけどね…
そういえば彼女の名前なんだったけ？

「ところでセドリック、認定試験に合格したんだってな？」

「うん、なんとかね…」

「なんで合格できたか謎だが、そんなセドリックなら当然『数学大全』にも手を付けているんだろ？もしかして、もう読破したとか？」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら聞いてくるアレックス。

「いや、『数学大全』はまだ…言葉の面にちょっと問題が」

「おいおい、認定試験に合格したセドリック様が、言葉に問題があるとか冗談だろう？」

もはや侮蔑の表情を隠そうともしないアレックス、しかし事実なのだから大して腹は立たない。ただアレックスの態度に『年齢の割に幼い』と思うだけだ。

「読めない訳じゃないんだ。ただ書きが上手くいかないから、そちらに集中しているだけで」

嘘じゃない。写本ギルドの認可を得たリイ先生の監督下、写本を続けてひたすら書き言葉を学ぼうとしている。

困ったことに、全く身についている気がしないのだが…

「読み書き計算は基本だろう？ そんなんで、どうやって認定試験を合格したのかなあ？ 是非ご教示願いたいものですなセドリック先生よお」

アレックスの口調はもはやチンピラである。こんなのが兄とは思いたくもないな…

「計算問題を解いた、計算なら文字の書きは関係無いから」

「おーおー、数学大全も読んでないのに、あの計算問題を解いたと、さすがはセドリック大先生は違いますなあ」

「アレックス！ 口が過ぎますよ！」

流石に、アレックスの言葉に母も耐えかねたのだろう。しかしアレックスは「へいへい」と答えるだけだ。

アレックスがスワン子爵家の跡継ぎだと思えば、スワン子爵家の未来は暗いな…

「僕が『数学大全』を読んでないのは事実だし、文字を書けないのも事実だから、あまりアレックス兄さんを責めないで」

アレックスに呆れながらも母にそう伝え、セドリックは出迎えの場から一人屋敷に戻るのだった。

第七章 数学大全と負の数

兄アレックスに言われたからというのもあるけれど、この世界の数学水準を知るのも悪くないと考え『数学大全』を手にとって開く。

序盤の内容はほとんど算数、数学大全というからには一通り全てを網羅しているのだろう、この辺は読み飛ばす。

しかし、読み進めているうちに、違和感が生じる。そう、数学では当然あるべき「負の数」の概念が出てこないのだ。

読みにくい文章を読み飛ばしながら、数学大全全ての数式を確認する。そして確信する。

「この世界に…負の数の概念が…ない…」

早速リリィ先生の部屋を訪れる。

「なあに？今日はアレックスさんが帰ってくる日じゃなかったの？」

「うん、そのアレックスに挑発されて、数学大全に目を通したんだけど…」

「それで、どうしたの？」

「例えば、手持ちに銀貨が五枚あるとする。そこで銀貨八枚を支払ったとしたら、数式としてどうなる？」

一瞬、リリィ先生の顔に緊張が走ったように感じたけど、それもすぐに霧散する。

「そこでは二つの概念が発生するわね、『手持ち銀貨』が〇枚になり『借金銀貨』が三枚になるのよ」

「その『手持ち銀貨』と『借金銀貨』を統一して扱う手法は？」

「……ないわね。少なくとも、今の所は」

「やはり、そうか」

「それで？それと『数学大全』読破と何の関係があるの？」

「リリィ先生、数学大全は全ての数学を網羅しているとされる名著ですよね」

「そうよ、そんな子供でも知って…ってセドリックもまだ六歳になったばかりね」

「その、数学大全に記されていない概念を、仮に発表したらどうなりますか？」

「…その顔、既に覚悟を決めているようだけど、止めておきなさい。悪いようにはしないわよ。

そもそも学会は保守的な所で…」

リリイ先生は何かを感じ取ったのだろう、何かを隠しているようにすら感じる。そして自分の行為が危険だとも、やんわり警告してくれている。

「だけど、僕もこれから文官を目指して学園に入らなければならない！ だけど、僕は、書き言葉が致命的にできない！」

「落ち着いて…本当に、悪いようには絶対にしないから、ね？ まずは焦らず、写本を続けてみましょう」

リリイ先生の言葉にひとまず頷くが、セドリックの内心では『負の数で勝負』という気持ちで芽生えたのであった。

第八章 トイレ子爵令息と呼ばれる屈辱

時が経ち、十歳の誕生日を迎えた、貴族は十歳になると学園に入るという選択肢が生まれる。しかし、残念ながらグンマー王国の表記を：未だに身につけられていない。

大量の写本をしても、法則性がまるでわからない。

リリイ先生の言う「丸暗記から始めた方がいい、実際使って間違えたら直せばいい」というやり方が正解だったのだろうか：だけど時は巻き戻せない。

誕生パーティーが開かれるとき、リリイ先生は「楽しみにしてなさい」と悪戯げに笑っていたが、何だろうか？

「皆さん、セドリックの誕生パーティーによく来てくださいました！皆さんもお気づきでしょうが、我がスワン子爵家では憎き悪臭に極めて有効な手段を手に入れました！これは、全てセドリックの手腕によるものです！」

父であるスワン子爵が挨拶を述べる、それに続いてリリイ先生が述べる。

「今回の悪臭対策、トイレと呼んでいます、この論文の功績はアカデミーに認められ、セドリック様は特例としてアカデミー入学資格を得ることとなりました！これに伴い、王家からの授与式が行われます！皆様振るってご参加ください！」

論文なんて書いた覚えが無いぞ：リリイ先生を見ると、口元が笑っている：リリイ先生の仕業か！

貴族達から一斉の拍手が上がる。いや、トイレは単純な構成だし、肥だめの功績は俺じゃなく使用人の功績なんだけどな：

あ、長男アレックスだけはムスツとした顔で形ばかりの拍手をしているな、相変わらずだな。あんな態度で、本当に子爵家の跡継ぎとして大丈夫か？

それに対し、妹アリアは満面の笑みで、顔を紅潮させて拍手してくれている。相変わらず可愛いなあ：

学園に入るのも難しいと思っていたのに、まさか一足飛びにアカデミー入学が決まったか：そもそも大丈夫なのかな。

「セドリックお兄様、アカデミー入学おめでとうございます！」

妹アリアは真っ先に駆け寄り、純粹に喜んでくれているが、文字も書けないで最高学府入学のプレッシャーが酷い、吐きそう。

トイレと呼ばれる俺が吐くとか、洒落にもならん大惨事だな…と自虐しながら、なんとか吐きを抑える。

そして、貴族達が一斉に俺のそばに寄ってくる。

「セドリック様、いえトイレ子爵令息とお呼びした方がよろしいですね！」

「トイレ子爵令息、トイレの設計図などは公開される予定はありますか？」

「トイレ子爵令息、わが娘と是非顔合わせを…」

その貴族ども、誰がトイレ子爵令息だ！

しかし、ただの子爵令息としては何も反論できず、ただ曖昧な笑みを浮かべながら、無難に対応するしかない。

いや、マジで貴族達の目はキラキラしていて、侮蔑の色は一切無く敬意のみが感じられるんだよな。

「ふん、上手くやったものだ、精々スワン家の家名に泥を塗らないようにな！」

長男アレックスは普段幼い言動が目立つが、今回ばかりは全くの同意である…アリアがアレックスを睨んでいるけど、今回ばかりは俺もアレックスに同感である。

「ふふっ、大丈夫ですよ。まだ公にはできませんが、私がセドリックの補佐になることになっています」

「ああ、リリィ先生！一生ついていきます！」

…ってあれ？そもそもリリィ先生の発表でこんなことになったんだよな？マツチポンプじゃねーか！

第九章 「がくせい」授与式

誕生パーティーから数日後、授与式とやらのために王宮に出向くことになった。

物凄くパリツとした、貴族然とした服装、油で整えられた髪、普段は履かない綺麗な靴。

王宮に向かう馬車の隣にはリリイ先生、向かいに父であるスワン子爵が座っている。

「ところで、この授与式って、何を授与されるんですか？」

「いや、私も詳細は知らされていない。むしろリリイ先生の方が詳しいだろう」

「で、リリイ先生、どうなんですか？」

「それは、着いてからのお楽しみ♪」

はぐらかされてしまった、誕生パーティーでのマッチポンプ行為、まだ完全に許した訳じゃないからリリイ先生…

いや、リリイ先生が補佐で入ってくれないとマジで困るから、そんなに責め立てたりはしないけど、そんなには。

そんなことを話したり、授与式について無駄に考えているうちに、王宮に着いた。

しばらく…と言うには長い時間待たされてから、謁見の間に呼ばれる。

威厳を持った国王陛下が、重々しく言葉を発する。

「そなたが、トイレを開発したというセドリックとやらか」

「はっ、セドリック・スワンと申します、国王陛下においてはご機嫌うるわしゅう」

「よいよい、おおよその話と成果については、学力認定員リリイ・マルセーネから聞き及んでおる。こたびの報償として、セドリックに学聖の位を与え、今後はセドリック・トイレ学聖を名乗るが良い」

まさかのトイレ子爵令息から、トイレ学生かよ…マジですか、もう泣きたい。けど国王陛下に無礼は働けない。

「は、ありがたき幸せ！」

「セドリック・トイレ学聖は、言語に若干の不自由を抱えていると聞く。そこに配慮し、リリイ・マルセーネを学力認定員の任を解き、学聖の専属補佐に任命する」

「はい、承りました」

あ、リリイ先生が補佐に入るのはマジの決定事項だったんだ。良かった…のか？本当に？いや、リリイ先生がいないと論文も書けないからこれでいいんだ、そう信じないとやってられない。

「セドリック・トイレ学聖は、アカデミーに入り、その知性を存分に国のために振るって欲しい」

「ご期待に添えるよう、尽力いたします」

「では、下がってよし」

しかし、学生にするだけなのに、なんで国王陛下がわざわざ学生任命なんてするんだ？

リリイ先生は賞賛の笑みを浮かべ、父スワン子爵も「学聖の位を賜るとは、我が家の誇りだ」などと言っているが、アカデミーの学生はそれほど高い地位だったか？

余談だが、学聖とは『一代限りの伯爵位相当』であり、セドリックとしては途方もない出世なのだが、本人だけは知るよしもない。

第十章 アカデミーの学生に研究室？

俺はアカデミーの門を潜った。

「セドリック・トイレ学聖ですネ？どうぞこちらに」

トイレ学聖の呼び名はどうかしたいけど、ここはグツと我慢する。

「トイレ学聖の研究室はこちらになります、リリイ・マルセーネ補佐官は既においでになられています」

「わかりました」

中に入ると、リリイ先生がお茶を飲んでくつろいでいた。

「リリイ先生…」

「いやだな、もう先生じゃなくて、セドリック様の補佐ですよ」

「様づけは止めてくれ…今まで通りセドリックでいいよ」

「トイレ学聖じゃなくて？」

「それは本気で止めてくれ！」

リリイ先生と睨み合っていたが、同時に笑い出す。

「さて、学聖様、これからどうしますか？」

「つていうか、学生に研究室って普通じゃない気がするんだけど」

「いえいえ、学聖を賜ったなら、これ位の待遇は当然よ」

「え、アカデミーの学生は全員研究室を持っているの？」

「セドリック？学聖はあなただけよ？」

何か、互いに齟齬があるようだ、それもかなり深刻な。

リリイ先生も気づいたようで、紙に記す。

『G&A』『G&A』

「前者がアカデミーに属する学生の表記ね、で後者があなたの賜った学聖の表記」

「こんなのわからない…」

「カナキが単語の冒頭に付く場合、爵位やそれに準ずる意味を持つみたいよ…多分」

「先生、以前に法則性は見いだせないと言ってませんでしたか？」

「…これでも必死に見つけた、数少ない法則らしきものの一つよ、あまり虐めないで」

そうか、リリィ先生も苦労してるんだな…

っていうか、学生じゃなくて爵位に準ずる称号だったのか…どの程度の立ち位置なのだろう？

第十一章

アカデミー研究室の住人になったけど、正直何をしたらいいのかわからない。

ただ、トイレの構造と肥だめでの肥料作成に関わる収入が凄まじい…早くも金貨百五十枚に届く勢いだ。

金貨一枚で平民一家が一年過ごせるらしいので、結構莫大な金額だ。

「リリイ先生、僕は何をすればいいんでしょうね」

「さあ？やりたい事をやってればいいんじゃない？」

「そうは言われても、学聖？としての義務とか無いんですか？例えば、学生に何か教えたり…」

「書き言葉も書けないのに、何をどうやって教えるの？」

そう言われると、ぐうの音も出ない。

「じゃあ論文執筆とか…」

「同じ言葉を繰り返させないで」

確かに、論文もグンマー王国の言葉で書かなきゃいけないんだ…

「では、家庭教師時代と同じく写本でもしますかね…」

「でも、あの写経とやらは、結局セドリックの書き言葉を全く上達させてくれなかったじゃない？」

「かと言って、何もやることがないのは辛いですよ」

「写本じゃなくて、自分で文章を書いてご覧なさい。間違った所は私が指摘してあげるから」
「うげえ…」

実は、一度だけ挑戦しようとしたことはあるのだ。しかしその紙は訂正の指導文で真っ赤に染まったのだ。

本当にグンマー言語の教育はどうなっているんだと、最低限の法則性でもあれば…

「まあ、いいじゃない。トイレの収入で今や富豪じゃない？本当に羨ましいったら」

「人は、金があるだけじゃ幸せになれないんですよ」

「それ、平民の前で言ったら殺されるわよ？」

いや、金があるだけで確かに助かるんだけど、生きがいつていうか…
そんなことを考えていると、慌ただしノックの音がした。

「セドリック・トイレ学聖！突然で申し訳ありませんが、数学の教授が体調を崩したので代理をお願いできませんか？」

「喜んで！」

ふっ、数学っていつでも、あの『数学大全』水準だろ…教えるのなんて楽勝だ！

第十二章 がくせいとしての数学？教授…前編

「えー、数学の教授が体調を崩したので、その代理を務めます、セドリックです！よろしく！」

教壇に立ち、まずは学生達の心を掴もうと元気よく話す。

「あれが、噂のトイレ学聖」

「うちの屋敷もトイレ導入したんだよ、効果が凄いの…」

えーい、トイレトイレうるさい…

「代理ですが引き継ぎができなかったので、まず皆さんの学力を把握するため簡単なテストを行います！」

アカデミーと数学大全のレベル感からすると、自然数の掛け算割り算、分数の四則演算辺り
でよからうと問題を黒板に書く。

学生達の様子から、そろそろいいかなと思う時点で答案を回収するが…

「これは酷い、早くなんとかしないと」

自然数の掛け算割り算は概ね解けてるんだけど、分数の足し算がもう駄目だ、通分ができて
る学生が三十人中一人か…

「えー、答案を見る限り、分数の計算が皆さん苦手なようですね。今日は分数の足し算について
教えます！」

学生達はざわめくが、その理由はわからない。

まずは黒板に円を二つ書き、片方をおよそ三等分、もう片方を四等分する。

等分した円のうち、右上の一つの等分された領域をそれぞれ塗りつぶし「 $\frac{1}{3} + \frac{1}{4} =$ 」
と記す。

「この $\frac{1}{3} + \frac{1}{4}$ を図示するようになります。皆さんの答案の中にはこれに対し $\frac{2}{7}$ と答
えてる方が大多数でしたが、違和感がありませんか？」

ここで「 $\frac{2}{7}$ 」と書き、円を描いて歪ながら七等分し、右上二つの領域を塗りつぶす。そして、大きくその円にバツをつける。

「図示したら、明らかにおかしいことがわかったと思います」

誤答したのがほとんどの学生だけに、騒然とした声が大きくなる。

「分数の足し算、そして引き算では通分という分母を合わせる行為が必要です。通分を図示するとうす！」

三分割した円、四分割した円の両方に線を書き加え、両方を十二分割する。
そして「 $\frac{1}{3} + \frac{1}{4}$ 」に「 $\frac{4}{12} + \frac{3}{12}$ 」と追記する。

「通分とは、こうして大きさの単位が異なるものを統一することです！図の中の塗りつぶされた領域からも分かるとおり、同じ量を示しています！」

黒板に「 $\frac{1}{3} + \frac{1}{4} = \frac{4}{12} + \frac{3}{12} = \frac{7}{12}$ 」の式が出来上がる。

「ゆえに、答えは $\frac{7}{12}$ となります、通分の必要性はわかりましたか？引き算も足し算と同様に通分すればいいですね！」

学生達は衝撃を受けたのか、今までの騒然とした声すら消え失せた。

「…ここまで、分かりやすい分数の計算の説明をされたのは初めてだ…」

「なんか、もう分数の計算が怖くない…」

「今までの通分についての教えは何だったんだ…？」

そんな一部の学生をつぶやきが教室に響く中、俺は無事数学教師の代理をこなせたと大満足で研究室に戻るのであった。

第十三章 がくせいとしての数学？教授…後編

通分の授業は凄まじい反響を呼んだらしい。他の数学教授達も、こぞって同じ教え方を始めたようだ。

そして、体調を崩した数学教師の体調が復活していないとのことで、再び代理教師として教壇に立つ。

「まだ数学の教授の体調が良くないので、今日も代理を務めます、セドリックです！」

学生達は騒めきの声を上げるが、今回はかなり好意的な雰囲気を感じられる。

改めて小テストを行ったところ、通分についてはほぼ問題ない水準になってきた、そして分数の掛け算は案外できてるんだな。

問題は分数の割り算か、これは日本でも苦手な人が結構いるんだよな…大人でも…

「皆さんは分数の足し算、引き算、掛け算は概ね問題が無さそうなので、今日は分数の割り算について教えます！」

「学聖様…分数の割り算は、少なくともアカデミーレベルでも最高峰の難易度ですが…」

学生の一人が恐る恐る声を掛けてくるが「心配ない！」と声を掛けて、授業を始める。

「まず、 $12 \div 6 = 2$ $12 \div 4 = 3$ $12 \div 3 = 4$ $12 \div 2 = 6$ $12 \div 1 = 12$ なる、これは皆も理解しているだろう」

数式を書いてから、横軸に割る数、縦軸に答えの数字を書いたグラフを描く。

「このグラフから類推できることは、 $12 \div 1/2$ すなわち $12 \div 0.5$ は少なくとも12を超えることは明らかだな？」

グラフの曲線を12から上に向かって伸ばす。

「割り算とは、実は分数そのものだ、すなわち、 $12 \div 1/2$ は $12 / (1/2)$ となる、これを分子分母に2を掛ければ分母は1に、分子は24になる、これが答えだ」

教室の騒めきが凄い事になる。

「同様に $12 \div 1/3$ は $12/(1/3)$ となり、分子分母に3を掛ければ分母は1となり、分子は36になる、これが答えだ。これを一般化するなら、大分数の分母を1になるように計算すれば分母は整数として扱えるようになる、この大分数の分母の値を、分母分子に掛ければ良いことになる。結果的に割り算の割る数が分数の場合には、分子と分母を逆転させて掛け算にすればいいことになる理屈はわかっただろう」

こうして、分数の計算例を細かく次々と黒板に書くが、騒めきは止まらない。

逆数とかいう概念は説明に使わない、俺自身も自信がない事は使わないに限る。

学生達はスタンディングオベーションだ、拍手喝采だ。

「すげえ、アカデミー最高峰と呼ばれる分数の割り算がこれほど分かりやすく説明されるとは……」

「学聖を賜ったのは伊達じゃない！」

「これで、俺も胸を張ってアカデミー最高峰と言える！」

「馬鹿野郎！これからは、これが当たり前の授業になるんだから、お前に優位性などねえよ！」

「それでも……だとしても、この授業は感動的でした……」

一部の学生は、涙をながしていたが、ちよつと大げさじゃないかな？

まあ、学生達が満足してくれたなら代理教師として言うことは無い、今日も大満足で研究室に戻るのであった。

第十四章 衛生環境の改善論文

二回の代理数学教師は大成功だったようだ、ほとんどの数学教師は俺の教え方を、多かれ少なかれ吸収して教えているようだ。

ごく少数の数学教師は頑なに、数学大全に基づいた従来通りの教え方をしているようだ、学生達の気持ちは離れているらしい。

そりゃそうだ、教育では「分からない事を分かるようにする」のが大切なのであって、権威を振りかざす事じゃない。

「で、学聖さん。臨時教師の役割が終わった今、何を考えているのでしょうか？」

リリイ先生が意地悪く言ってくる。

「そうだな…やっぱ学聖の発端となった、衛生に関する内容が受けるんじゃないかな」

「どうだろうね、トイレが評価されたのって衛生というより、悪臭対策だったから実感しやすかったんじゃないの？」

「だからって、地道な衛生対策を放置していい理由にはならない。学聖という地位を得た今だからこそ、そういう事ができるはず」

「あつそ、じゃあ頑張ってるね」

「いや、俺は文章書けないんだから、当然リリイ先生にもご協力お願いしますよ」

「ええ」

リリイ先生は頬を膨らませながらも、特に対価を求めるつもりもないらしい：一応地位的には俺の補佐官だしな。

「まあ、今回も別に難しいことじゃないよ、生活排水：たとえば洗濯した水を綺麗にして川に流そうって話だから」

「すごい地味そう…それ、本当に効果あるの？」

「正直、どれほど効果があるかはわからないな…ただ川の上流で捨てられた洗濯水を、下流の人がそのまま使う事はなくなるから無意味じゃないと思う」

「ま、頑張ってるね」

「だから、リリイ先生が論文書くんですって！」

どこかやる気のないリリイ先生を叩き起こしたけど、正直俺の発想なんて大したことじゃない

いんだよな。

底に細かい砂、そこから小さい石、少しずつ大きな石を積んでいくだけの単純な濾過装置だから…

まずは、簡単な図を描いて、リリイ先生に見せる。

「で、この図に何を書き加えればいいの？正直この図だけで、構造は全て説明されてるよね？」

「う…上の石で大きな汚れを止めて、下の小さな石に行くとその大きさの汚れを止めて…」

「この図だと、それぞれの層で『汚れを止める』って書くだけだね」

「ごめん、リリイ先生…その『汚れを止める』が俺には書けないんだよ…」

「はいはい、わかったわかった…一つだけ書くから、あとはセドリックが書くこと！」

「ありがとうございます、リリイ先生！」

リリイ先生の記した『汚れを止める』と同じ綴りを、それぞれの層に記す。

「で、末尾には『これで水が綺麗になります』でいいの？」

「内容としてはいいんですけど…え、論文ってそんなんでいいんですか？」

「うん、私が書いたトイレ論文も目的、設計図と簡単な説明、得られた結果で通ったし」

「そういえば、その肝心のトイレ論文、本人である俺は見ただことないんですが！」

「もう提出して受理されてるから、図書館に行けば読めるわよ」

「なんで自分発案の論文を読み、わざわざ図書館に行くんだ…なんかおかしい」

まあ、何だかんだ自分では言葉を書けないので、論文執筆は基本リリイ先生に丸投げだな。

第十五章 負の数の論文

衛生環境について、正直すぐに他の案を思い浮かばない。

そんな中『負の数で勝負』の熱が再燃してきた。

自分では言葉を書けないが、『数学大全』の記述を参考にすれば、論文の体は整うだろう。リリイ先生は負の数の概要を聞いた時、なんだか否定的だったのでこれに関してはリリイ先生の力を借りない方がいいだろう。

「まずは数直線を使って、数直線での負の数の意義を語る…この記載は『数学大全』では…」

「なーにやってるの？」

「リリイ先生！」

「何を慌ててるのよ、あ、わかった！えっちな本…」

「違いますよ！」

「じゃあ、なんで隠すのよう…」

「いえ、自分なりの挑戦なんで、仕上がるまではリリイ先生には見て貰いたくなくて」

「もう、わかったわよ、頑張れ青年！」

ふう…焦った…

それから、負の数の意義と、数直線やグラフを利用した負の数を交えた四則演算を分数交えて書いて…

「さすがに、ゼロ割についての言及は要らないよな、極限は『数学大全』にも書かれてなかったし、きちんとゼロ割は禁止されてたし」

それから、数直線ベースだった説明に加えて、数式での説明も書き加えていく…『数学大全』を参考にしながら。

「で、できた…中学生レベルの内容とはいえ、自力で網羅しようとするの大変だな…」

「お、セドリック、出来上がったの？随分ぶ厚い論文ね…」

「ええ、リリイ先生！最終チェックお願いします！」

リリイ先生は俺の書いた負の数論文を受け取る。

「書き言葉は問題ないわね…だけど、この内容は…本気で発表するつもり？」

「ええ、きっとグンマー王国の技術発展に貢献できるはずです！」

「そう…なら、もう何も言わないわ…」

寂しげな笑顔で負の数論文を返してくるリリィ先生に、どこか不穏な気持ち^どが沸き起^おこるのだった。

第十六章 学会およびアカデミーからの追放

「それでは、セドリック・トイレ学聖の論文発表です！」

負の数論文の写しを、数学者達に配られると…ごく僅かの人は読み進めるが、多くの人は最初のページで顔をしかめる。

「これは異端思想ではないか！」

「まさに、これは『数学大全』に対する冒涇である！」

「ゼロより小さな数値など、認められるはずがないのだ！」

非難轟々である、まるで『数学大全』が彼らのバイブルかのようなのだ。しかし異端思想って…

「いえ、この考えを利用すれば、例えば所持金と借金を統一して扱えますし、地上と地下の距離にも…」

「数学は、そんな大衆のための道具ではない！」

「しかし、これは大問題であるな…これはトイレ学聖の深刻な異端疑惑である」

「まずは、学会からの追放は最低限必要でしょう」

この言葉に、その場の全員が拍手をしている。

一体何だこれは…これが学者の実態なのか？日本の大学を知っていると、到底信じられない…

「残念だよ、トイレ学聖。分数の教育の手腕はあれほど優れていたのに…異端思想の持ち主となると、あの教育も弾圧されるであろう」

「セドリック・トイレ学聖、学会追放が満場一致で可決されたので、ご退場を」

もはや俺は顔面蒼白だっただろう、学会の会場を追い出されアカデミーに戻ると、既にアカデミー学長にも話を通っていたらしい。

「セドリック・トイレ学聖…まあ、学聖と呼ぶのもこれが最後になりました。残念ながら異端の者をアカデミーに置いておくわけにはいきません、早速、退去してください。明日まで居座るようなら、不法侵入としての罪に問われると覚悟してください」

あまりの扱いに顔を蒼白にしながら、もはや今日限りの自分の研究室に戻る。

「はは…リリイ先生、俺が異端だって…学会どころかアカデミーを追放になっちゃった。今日中に出て行かなきゃならなかったよ」

「…そう、さすがに実家に戻るのも気まずいでしょうから、私の家に来る？」

「いいんですか？」

「いえ、いいのよ。責任の半分は私にもあるのだから…」

リリイ先生に、一体何の責任があるというのだろうか…警告に従わなかったこととは思えない、あれは俺の決定だったのだ、責任は全て俺にある。

そうして、アカデミーから逃げるように、リリイ先生の家にお世話になることにした。

第十七章 国家騒乱罪、そしてグンマー王国追放

リリイ先生の家に匿って貰った。

しかし、それは一晩しか続かず、翌日には王国の近衛騎士がリリイ先生の家まで来た。

「異端のセドリック、王宮への出頭命令である！従わないなら拘束してでも従ってもらうぞ！」

流石に近衛騎士相手に逃げられるとは思えない。おとなしく従い、ボロい馬車に揺られて王宮に出頭する。

以前の学聖授与式では結構待たされたのに、今回はすぐさま国王陛下の前に連れ出される。優雅な礼もできない、両脇に騎士が拘束し、完全に扱いは罪人である。

「異端のセドリック・トイレ、現時点をもってトイレ学聖の地位を剥奪する！そして罪状は異端思想を広げようとしたことによる国家騒乱罪。スワン子爵も、今回の件でセドリックはスワン家とはもはや無関係だと主張している。流石にトイレの功績は無視できぬ故、斬首刑だけは見逃してやる。ただし、グンマー王国からは追放する、ただのセドリックよ、今後生涯王国領土に立ち入ることまかりならぬ！」

そんな…グンマー王国の外なんて、不毛の大地ばかりが広がる絶望の地ではないか。いっそ、斬首刑の方が温情に思えるほどだ。

そうして、再びボロい馬車に乗せられ、グンマー王国の外に連れられていく…

不毛の大地の中で、俺は馬車を降ろされ、そのまま馬車はグンマー王国に戻っていく。

この不毛の大地では、水の入手すら絶望的なのが明らかだな。

はは、俺の命はよくて三日といったところか…

その馬車と入れ違いになるように、馬を駆けてくる女性…あれはリリイ先生じゃないか！

リリイ先生、なんでわざわざ…無断でグンマー王国外に出れば、もう入国が許されないのに。正式な出国許可など、通常は出ない。今回の追放のような事があれば、国外への搬送員が取得するのが精々だ。

なんで、リリイ先生は、自ら国外追放になるような行為を…

第十八章 リリィ先生の過去

リリィ先生が、馬で俺の近くまでくると、かつこ良く馬を下りる。

「待たせたわね…責任の半分を果たしに来たわよ」

「リリィ先生、こんな不毛の大地に、わざわざ死にに来るような真似なんて、俺は望んでませんよ！」

「落ち着きなさい、私も別に死ぬ気なんてないわ。だけど、その前に、私の罪を告白しなければならぬの」

「リリィ先生の罪って…何も悪い事なんてしてないでしょう、むしろ俺を守ろうとしてくれた！」

「聞きなさい、私はセドリックを王家の影として監視し続けていたの。その目的は『虚数』やそれに至るための『負の数』を知っている者の監視と行動制限。伯爵家以下だと、割と日本からの転生者が産まれやすいのよ？だから中位以下の貴族は実質王家の監視対象」

「転生者…って言い回し、もしかしてリリィ先生も？」

「ええ、特に男爵家はよく転生者が産まれるのよね、マルセーネ男爵家も同じ。そして、五歳の時に受けた学力認定試験、覚えてる？あれ、まさに王家が転生者をあぶり出すためのもののよ」

「そんな、じゃあ俺の試験結果もヤバかったのでは」

「ごめんね、勝手に答案にそれっぽい答えを書いて、セドリックを『ギフトッドの可能性が高い』って報告したのよ。ギフトッドの可能性があれば、私は生涯に近いレベルで監視員という立場を確保できる。だから、セドリックをギフトッドに仕立て上げて、私はセドリックを利用していたのよ」

「利用って…なぜ転生者として報告しなかったんですか？」

「転生者と分かったら、グンマー王国の要である『とある場所』に連れて行かれる。そこで、その『とある場所』の鍵となる『問題』に敢えて誤答しなければならぬの。一度でも誤答した者は、二度と再挑戦できない仕組みなのよね…だけど、それでも幼い私は誤答をして、王家の影として生き延びることしかできなかった…それが、セドリックを転生者として報告しなかった理由ね、私が『この世界』を脱出するために」

リリィ先生の過酷な人生に胸を打たれる、利用したと言ってるけど、むしろ俺を守ってくれている。

「トイレ開発は、まさにギフトドとしての説得力を、これ以上なく高めてくれたわ。学聖ともなれば、もはや転生者と分かってても、王家の影になる可能性はなくなる。だけど、負の数をほめかすセドリックを見る度に迷ったわ。本当にセドリックを使って、自分の目的を達する事への罪悪感。セドリックが幸せだったなら、こんな事に巻き込んではいけな」と

「でも、俺は勝手に負の数論文を発表し、こんな事になってしまった」

「セドリックなら『虚数』を知ってるでしょうから、簡単に説明するわね。ここグンマー王国は、日本の群馬県とある天才の手によって、虚数空間に独立した場所なの。虚数空間から日本にアクセスする方法は王家の独占、その独占を守るための『虚数』とそれに迫りうる『負の数』の徹底的な弾圧なのよ。それこそ数学者を神学者のごとく仕立て上げ、数学大全をバイブルの如く扱うようにしてまで」

凄まじい話だ：

「そして、私は単独ではもはや『とある場所』の鍵は開けない…だけど、まだ『問題』に答えをしていないセドリックなら、日本へのアクセスの鍵を開けられる。これが、私の罪であり、責任よ。せめて私たちが死なないために、日本に帰りましょう…」

こんな不毛の荒野にいても死ぬだけだ、俺は力強く頷き『とある場所』に二人乗りの馬で向かう。

乗馬なんてしたことがないから、思いっきりリリイ先生に抱きついて乗ったことはここだけの秘密だ。

第十九章 グンマー王国からの脱出

『とある場所』にたどり着いた、まさかの荒野のど真ん中に扉があり、その裏側に回っても、ただの荒野という代物だ。

そして辺りには、数字のブロックが散らばっている。

扉には『π≡□□』とある、これが『問題』で、この□に数字のブロックを入れるのだろう。

「念のために聞くけど、答えは大丈夫よね？」

「元理系大学生だぜ俺、当然分かってる『・』だろ」

「やっぱ理系だったんだ、なんかアプローチが色々理系っぽかったからね」

リリイ先生の先ほどまでの深刻な表情も、今は和らいでいる、いいことだ。

「本当にいいの？この姿で日本に戻っても…大変なことになりそうだけど」

「こんな水も手に入らない、不毛の荒野では生きていけないだろ、まずは生きることが大切だ」

「ごめんね…」

「リリイ先生は悪くない、むしろ今までよく頑張っていましたね」

「ねえ、リリイ先生って本当に止めてよ、リリイで良いわよ。実は日本人だった時も、百合って名前だったのよ、凄い偶然だったけど」

「わかった、リリイ…日本に戻ったら百合だな」

そして、ブロックの中から唯一のマイナスブロックを探し、『π≡□□』を完成させる。

「ねえ『π≡□□』ってなんか『愛と愛が重なる時』に見えない？」

「随分と詩的な表現をするんだな」

「そう…だから…」

そう言って、リリイ先生、いやリリイは俺の唇に唇を重ねた。

その時、扉が強い光を発して開いた。扉の向こうに自衛隊員らしき人達がいる、懐かしの日本の風景が見える。

「君達は群馬、いやグンマー王国からの脱出者か！」

「ええ」「はい」

「わかった、君達の身柄を保護しよう。そして今の群馬、いやグンマー王国に関する情報提供をしてほしい」

扉を潜ると、一気に黒目黒髪というか、転生前の姿に戻った。

「こんなことがあるのか、今の群馬は本当に、何がどうなっているというのだ…」

自衛隊員がつぶやくが、何もかもが懐かしい…日本だ…

リリィ、いや百合の姿を見ると…驚くことにグンマー王国では八歳上だった百合は、当時大
学三年だった俺より少し年下に見える、若い。

自衛隊員と役人らしき人に、グンマー王国の情報提供を終えたら、役人が提案をしてきた。

「君達は、拉致被害者の扱いになる。もはや行方不明期間が長く、死亡扱いになっている可能性が高いから、特例で戸籍発行もできるのだが、どうする？」

俺たちは今の西暦を聞き、確かに親の生存も絶望的な日時が流れていたので、戸籍発行を受け入れた。

色々な手続きは百合と共に言い、それが一段落した時に語りかけた

「百合、今後も俺と一緒に生きてくれないか？」

「こんな打算に塗れた女に引かなかったら、貴方の人生台無しよ」

「ははっ、前世では彼女もいなかった身だ。それでも俺は百合を信じて愛している、その打算で是非俺を尻に敷いてくれよ」

「もう、どうなっても、知らない…」

Happy End…?